

# 仏の願い、私の願い

著者	木越 渉
雑誌名	真実心
号	36
ページ	49-72
発行年	2015-03-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000479/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000479/</a>

## 仏の願い、私の願い

木 越 渉

こんにちは。よろしくお願いします。

東本願寺の参務<sup>さんむ</sup>を務めています木越と申します。

みなさんたぶん、大学に入られてすぐに東本願寺に來られたかと思いますが、覚えていますか。巨大な世界一大きな木造建築物に入っていました。

今、一郷先生から紹介がありましたとおり、「私の願い、仏の願い」というテーマを掲げさせていただきますが、結論から言いますと、私の願いの一番深いところにあるものが、「根源的要求」といいますが、それが実は如来の、仏の願いと相通じているという話を今日させていただきますかと思っております。

一郷先生からも言われましたけれども、私はアメリカに八年間いました。帰国子女です。実は私は「国」というものを非常に大きな課題としております。そのきっかけとなっ

たことについて、まずお話しいたします。ちょっと黒板を使わせていただきます。

これはアメリカの小学生でも知っている言葉です。アメリカはご存知のように王様のようない、昔からの権力者・支配者というものがありません。そういう国が独立して一致団結して“国”を支えていくためにはどうするか。アメリカの人たちは“旗”に忠誠を誓います。「星条旗」ですね。

“I pledge allegiance to the Flag of the United States of America, and to the Republic for which it stands, one Nation under God, indivisible, with liberty and justice for all.”

「私は共和制をしき、神の元で統一されているこの国、独立して、そして自由と正義を重んじる、このアメリカの旗に忠誠を誓います」

という言葉があります。これはアメリカでは小学校の時から教えられる言葉です。「国を思え。この国は独立した国である」と。アメリカは独立戦争を経験しています。この「勝ち取ったこの自由をみんなで守ろう」ということです。そういう国だからこそ強いんでしょうかね。しかし、自国に対する揺るぎのない自信は同時に絶対的な価値観を生み出します。その価値観を他国に押しつけていろんな摩擦を生んでいるのも現実です。

アメリカの国歌、みなさん内容を知っていますか。フランシス・スコットというアメリ

私の願い、私の願い

カ of 法律家にして詩人が作りました。アメリカの独立戦争の時に、友達が英国の船に捕らえられて捕虜となっていました。そこで英国の船の船長に掛け合って何とか自由にしてもらう約束をもらうのですが、「その代わり、アメリカの基地を夜のうちに攻撃するので、攻撃をしている間、船の上に留まってもらう」と言われます。スコットは大きなガレー船の一室に閉じ込められました。そこで見たのは自国アメリカの人たちが英国の船の砲撃にさらされる場面であります。朝まで持ちこたえることができたならば援軍が来るという状況の中で、ずっと船の中から基地を見守っていたのです。「マクヘンリー砦の攻防」と呼ばれる戦いです。夜中ずっと砲撃がなされるわけですが、砲撃の火薬が破裂した明かりがいつまで経っても倒れないアメリカの星条旗が照らし出すのです。ずっと立っているまま。その光景に感動した詩が実はアメリカの国歌になっております。聞いたことがありますでしょう。

♪ Oh, say can you see, by the dawn's early light . . .

国歌の言葉一つ一つが自由を高らかに歌い上げているわけです。その国歌にアメリカ国民は非常に大きなプライドを持っています。ちょっと日本の国歌とは違うかも知れませんが。

“国家に忠誠を誓う”ということですから、私が在籍していたのはカリフォルニア大学の付属小学校で、カリフォルニア大学の先生方がよく小学校に教えに来てくださっていました。私が大変尊敬する小学校の先生がおられたのですが、その先生が「この小学校にはアメリカ国民だけではなくて、いろんな国籍の子どもたちが学びに来てくれます。私はアメリカ国民であり、この国歌が大好きだからこの国歌を歌うけれども、みなさんはアメリカ国民とは限りませんので、もし歌を歌いたくなかったら歌わなくていいですよ。歌わなかったからといって、私がその歌わなかった子を嫌うということは決してありません」そう毎日毎日おっしゃってくださいました。一人一人の信念を非常に大事にしてくれる先生でした。私はそういう先生が大好きでしたから、日本人でありながらアメリカの国歌を歌わせていただいたのです。小学校の時代にずっとアメリカにいたのですが、アメリカという国をずっと感じながら育ちました。

帰ってきたのが一九六八年です。日本が高度成長時代に突入する入口の時代に日本に帰って来ました。小学校六年生の時に帰ってきましたが、今だったらどうですかね。違う香りのする子どもに対していろんなイジメがあるように私は聞きます。帰国子女という違った存在が非常に奇異な目で見られるということがありますが、私が帰ってきたと

仏の願い、私の願い

き、そういうことはありませんでした。放課後毎日のように友だちの家に呼ばれ、その友だちの両親がいろいろと、私は日本語を話せませんでしたから、ジェスチャーを交えて、「アメリカとはどういう所か、どういう国なんだ」というようなことを盛んに聞かれた記憶があります。学校の先生にも良く聞かれました。あの当時は、「今から日本は良くなっていくんだ」「みんながこの国を良くしていこう」、そういうことを一生懸命考えた時代だったと私は思います。

今は高度経済成長を成し遂げ、いろんな贅沢が許され、みんなが豊かになったけれども、みなさんもよくご存じのように、人間だけが置き去りにされてきたのが現代ということではないかなと思います。こういう国になってしまった責任というのは私たちにあります。今の子どもに対し非常に申し訳ないという気持ちでいっぱいです。

少し話は変わりますが、仏教というものに対してものすごく大きな誤解がいくつかあります。その一つは、“仏教を学ぶ者・お坊さんはお寺の中にずっと閉じこもっておる。”そのように感じる人が多いです。これは非常に大きな誤解です。もう一つ、“仏教というのは世間との接点がない”浮世離れた教えが仏教だと。現代社会とは関係がない、そのように思っている人が非常に多いですが、これも大きな誤解です。またよく聞くのは、

“仏教というのはおじいちゃんとおばあちゃんのための宗教”だと思ふ人が大勢おられます。それも大きな誤解です。もう一つ、“仏教というのは自分の願ひ事を叶えるためのもの”である“というのも大きな誤解です。仏教が絶えず課題にしているのは、“今”“今日”“現在”“この国”“この私”なのです。このことを今日ははっきりさせたいなと思つてやつてまいりました。今を課題にする、現在の苦しみを課題にする、そしてそれに応えていく、そして未来の国を拓いていく、これが仏教の大きな役割です。

みなさんは、この光華の学園が大事にしている教えが親鸞聖人が説いてくださった教えであるということはお聞きになったかと思ひます。親鸞という人の名前を高校の時から知つていたという人、手を挙げてもらえますか？では、親鸞は光華に来て初めて知つたという人、手を挙げてもらえますか？親鸞は今でも教科書に載つていますよね。親鸞という仏教徒がおられました。今から八百年前です。お釈迦さまが説いた教典は八万四千という数字が示すように膨大であります。しかし、親鸞聖人が「このお経こそが真実の教えである」と言つたのが『ふつせつむりようじゆきやう仏説無量寿経』というお経です。親鸞はまた、『あみだきやう仏説阿彌陀経』と、これら三つのお経が大事だと教えてくださっています。

昔、お釈迦様がおられた時代には文字に起こされたお経はありませんでした。全部“対

仏の願い、私の願い

機説法“です。お釈迦様が、お弟子、あるいは自分の話を聞く者に対して言葉で伝えていったのが仏教です。お釈迦様が亡くなった後、お釈迦様の弟子の一人が、「やっとあのやかましい尊者が死んだ。これで我々が自由に教えることができる」とこういう言葉を発したわけです。それを「危ない」と感じてくれた仏弟子たちが、「これはお釈迦様の言葉をきちつと残さないとだんだんと変質する」という危機感のもと、“ぶつてんけつじゅう 仏典結集”ということになります。何回も、何回も、時代を経て、お釈迦様の言葉をみんなで確かめ合うのです。やがて文字となつて經典が残っていくのですが、その中で親鸞聖人が「この三つのお経が大事やぞ」ということを教えてくださっています。特に大事なのが最初に挙げた『仏説無量寿経』というお経で、これを“だいきやう 大經”大いなる經典と親鸞聖人は教えてくださっています。この『仏説無量寿経』という經典の中に、実は、お念仏「南無阿弥陀仏」の番号の教えが載っております。

仏典結集の話をもう少しいたしますと、ちかかん 五百羅漢と言われる五百人のお釈迦様の高弟たち、悟りを開いたと言われておる仏弟子たち五百人が集まって、お釈迦様がどんな教えを説いたかということを協議するのですが、悟りを開いた人たちは人の話を経験などを通して聞くわけですから、了解が全部違うわけです。「お釈迦様はこう言つた」「いやいや私



はこう聞いた」「いやいやそうでない、こうでないか」という、自分の味わい、自分はこう了解したということをごんごん言い合うわけです。だから本当にお釈迦様が純粹に何を言ったかということがはつきりしなかったのです。そこで、「多聞第一」と呼ばれる阿難という仏弟子が呼ばれたのです。阿難尊者はずっとお釈迦様の横にいて、一字一句忘れないとして、全身で、耳をダンボのようにして聞いていた人です。その阿難が先生方の前に出て「如是我聞／私はかくの如く聞きたまいき」、私はこのように聞きました、お釈迦様が王舎城というお城におられた時にこんなことを言いました、そして最後に、これを『仏説無量寿経』と名付けられました、と。お釈迦様の言葉をまるでテープレコーダーのように一句一句を覚えていた方がおられたのです。それを聞いた五百人の高弟たちが「阿難の言う通りだ」「その通りだ」と言ってみんなの合意を得たものがお経として残されています。

その『仏説無量寿経』の中で阿難がある日、向こうから歩いてきたお釈迦様を見て、パッと跳びあがるのです。そして「光顔巍巍／お釈迦様の今日のお顔は特別光っておりますね」と、こういうことを言うのです。毎日お釈迦様の顔は光っていたのです。それにやると阿難が気がついたんです。そして、「お釈迦様が光り輝いているのは、他の仏のことを

仏の願い、私の願い

念じておられるからなんですね」と言われます。「他の仏の仕事が大事だということを深く受け止めておられるからこそ、お釈迦様は光輝いておるように見えるのですね」と、こういうことを言うのです。そうするとお釈迦様は「阿難、お前のその質問は、誰か他の人に聞いて、こういう質問をお釈迦様に言うとお釈迦様はきつと喜んでくれるぞといって聞いておるのか、お前自身の質問なのかどっちだ」と聞くのです。すると阿難は「これは私自身の中から出た質問であります。お釈迦様が光輝いておるのは他の仏の仕事を憶念（おくねん）されておられるからでしょうね」とおっしゃいます。そう阿難が言うとお釈迦様は「よきかなや、阿難／いいぞ、阿難。よくそれに気がつきました。今、まさに法を聞き留める者が現れた。それではいつの時代でも、どの国の衆生でも、すべてが等しく救われる阿弥陀の本願の教えを説こう」と言ってお釈迦様は阿弥陀如来の教えをずっと説いてくださっています。つまり、南無阿弥陀仏の意味をずっと説き明かされるわけです。

その阿弥陀の本願、そこに込められている願いを我々に伝えるため、阿弥陀如来の修業時代のお姿、法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）を登場させてくださっています。それが大経です。

この法蔵菩薩というお方が、世自在王仏（せじざいおうぶつ）という師匠についているわけですが、その世自在王仏に、「私は一切の恐れおののきのために大きな安心を与えたい」「一切の生きとし生

けるもののために大きな安心を与えたい」という願いを法蔵菩薩が立ててくださいました。これは如来の「総願そうがん」と言います。どんな仏さまでも持つ願いですね。"全てのものを救いたい"。具体的には、全ての恐れおののきに対して大きな安心を与えたい、ということ。法蔵菩薩が世自在王仏という自分の師匠に言います。「師匠、そのためには私はどのような国を建てればいいのか」という問いを發します。その時に世自在王仏は、「汝にょ自じ当とう知ち／汝、まさしく自ら知るべし」「その答えは私の中にあるのではなく、法蔵菩薩よ、お前自身の中にあるんだよ。お前ならきつと見つけることが出来る」ということをおっしゃってくださいっております。これは師弟関係の絶対的な信頼関係を表しているのだと思います。うらやましいですね。「先生、この苦しみはどうやったらなくなるのですか」と、すると先生は「その答えは私の中にはない。君の中にあるんだよ」「答えは全部自分の中にあるのだ。他人から答えをもらおうとは思うな。お前はきつとその答えを見つけれはるはず」と言うのです。

その言葉に觸発された法蔵菩薩は全ての国の全ての仏様の願い、つまりおしごとを全部網羅するのです。「法蔵」たる所以です。全ての仏法を自らの中に蓄積していくのです。そして自ら全てのものが、どの時代でも、どの国の人でも、どのような考えを持ったもの

仏の願い、私の願い

でも、平等に救われる仏法、すなわち願いをたてるのです。これを「阿弥陀如来の四十八願」といいます。

四十八の願いというのは、まず、どのような浄土をたてるのかを述べます。阿弥陀如来の国は、有名な言い方だけ紹介しますと、「西方浄土」、さいほう「安養浄土」、あんじょうあるいは「安樂浄土」、あんらくといえます。次に、どうすればその国に生まれることができるのかを述べ、そして、その国に生まれたならどんな仕事待ち受けているのかということがずっとあらわされています。

浄土というのは場所だけを限定しているように聞こえますけれども、実は「浄仏国土」、つまり仏様が国土を浄めるその「はたらき」そのものを示します。名詞でもあり動詞でもあります。「はたらき」です。

四十八願中、最初の願文は「無三悪趣の願」と呼びます。むさんあくしゆ「私が今から建てるこの国は、地獄、餓鬼、畜生のない国にしたいと思う」と誓われるのです。三つの悪いものを内容として含んでいることを「三悪趣」と言います。さんあくしゆ「六道」とも数えて言い当てます。つまり「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天」のことです。地獄というのはみなさんだいたいイメージできますか。血の池地獄とか、針の山地獄がありますね。血の池地獄とは、人の流し

た血が大きな海になっています。そこに人間が罰を受けて沈められるわけです。底がないわけですからどうするのかというと、隣の人を引きずり下ろして、その人を足がかりにして血の池の表面に浮かび上がろうとする。人を引きずり込まないと自分は助からないのです。針の山地獄というのは、下の方から鬼に追いついて立てられるわけです。針の山をずっと登って行かないといけないわけですが、人を自分の足の下に敷いて上がっていくわけです。

地獄の定義は「孤独」ということです。どこか地底深くにある世界のことではなく、まさしく我々の世界です。「苦しい」と言っても誰も助けてくれる人のいない、そういう世界。逆に、嬉しくてもその幸福を全てと共有できない世界。それを地獄といいます。ひとりぼっちの世界ですね。まさしく我々の生きているこの世界です。餓鬼道は「満足心のない世界」です。もうこれで十分です、ごちそうさまでした、と言って手を合わせることもできない世界を餓鬼道といいます。まだ足りないという思いが支配する世界、まさしく我々が生きているこの世界です。畜生道というのは、これは別に牛や馬のことではありません。漢訳を見ると「傍生<sup>ぼうじやう</sup>」と書きます。傍らを生きる。寝そべって横になっている牛や馬のことを連想しますがそうではありません。傍らを生みだしていく、そういう世界を

仏の願い、私の願い

畜生道といえます。つまり、自分だけが道の真ん中にいて、他を全部けちらしていくような、そういう世界を畜生道といえます。イジメなんかがそうですね。他人の不幸を自らの喜びとするような自分というものがありません。嫉妬心もそうかもしれません。畜生道、六道の真ん中にまさしく我々がいるのです。「修羅」というのは、地獄・餓鬼・畜生よりも苦しみは少ないものの、絶えず不安のある生活です。修羅場をくぐるという、言わば戦争状態です。決して枕を高くして寝られないような状態。みなさん大学を出て就職をされると、そこは修羅場と言ってもいいかもしれません。「人に負けたらアカン」という社会を我々は生きています。「人」というのは内容で言えば人情、「情」の世界です。好きか嫌いかで物事が判断されていくような世界。これは我々の世界です。最もやっかいなのが「天」、天上界です。物事が思い通りになる世界を天上界と言います。仏様の目から見るとこれも苦しみの世界なのです。「有頂天」が天上界で一番位の高い天です。みなさんは「有頂天になつて」と言われて嬉しいですか。決して嬉しくないですね。「お前一人だけ喜んでるな」ということです。「自分一人だけ思い通りになつてからといって喜ぶな。隣の人は泣いとるぞ」という意味の言葉だろうと思いますが、この有頂天も「一人だけ悦に入っている世界」です。だから、よくよく考えてみると地獄から天上界まで全

部ひとりぼっちの世界です。全部分断されています。繋がりのない世界を我々は生きていくということだと思えます。けれども、「そんなことないぞ」「私に友だちおるやないか」と言うかもしれません、それもたまたまです。利害関係によつては敵同士にもなります。仏はちゃんと我々の世界を言い当ててくださっているのです。

そのような国は作らない。「無三惡趣の願」、地獄・餓鬼・畜生のない世界にしたい、これがいわゆる阿弥陀如来の願心です。そして、その国を建てるために阿弥陀如来はどういうことをされたかという、我々の「苦しみの本質」をずつと観察してくださっています。そして、我々の苦しみを三つの深まりとして捉えてくださっています。どんな小さな苦しみにも三つの深まりがある。一番表面的な苦しみは、「苦しい、苦しい」と書いて「苦苦」<sup>くく</sup> 表面的な苦しみです。その元には物事が壊れていくことに対して苦しいと感じる苦があり、それを「壊苦」<sup>えく</sup> と示しています。そして全ての苦しみの大本に「行苦」<sup>ぎょうく</sup> があると教えてくださっています。苦苦は一番表面的な苦しみ、一番分かりやすい苦しみです。身体をパンと叩かれて感じる痛みと、物事が思い通りにならないという苦しみのことです。一番分かりやすい、日常で我々がいつも経験する苦しみです。『仏説無量寿經』の中では、「例え思い通りになったとしてもそれで苦しみはなくなりますか」と説いてくださ

私の願い、私の願い

っています。「なくなりやせんやろう」と言うのです。なぜなら物事が思い通りになったとしても、その底にはものが壊れていくという苦しみがあるのです。例えば、みなさん、一生懸命お金を貯めたいと思いついて、お金を貯めるとしましょう。例えば百万円をアルバイトして貯めました。ではそれで苦しみはなくなるかというと、なくなりはいけません。目減りしていかないだろうかという苦しみが沸きあがります。どう運用すればこの百万円が百万円の価値のままずっと継続していけるだろうか、いろんなことを考えます。あるいは、社長になりたいと願って一生懸命働き、社長になったとします。けれども社長になった途端に「この地位から転落せんだろうか？」という新たな苦しみが沸いて起こります。それで、転落しないためにどんなことでもします。上がってくる人を蹴落とさなければ自分の地位が危なくなります。そういう苦しみが待っています。物事が壊れていくという苦しみです。そして、どんな小さな苦しみの一番底にも「行苦」という苦しみがあると私は教えてくださいます。「物事が移りゆく」ということに我々は納得がいかないのだと、我々の一番底の苦しみを言い当ててくださっています。

人間の煩惱ぼんのうで一番深い煩惱に、自分の死に様さえ決めたいという煩惱、欲が起きます。あるお寺で、そこに三回お参りすると楽に死ねるという御利益をうたったお寺があり



ました。多くの方が参拝されたお寺です。非常に流行りました。三回お参りに行くというバスツアーに、私のお寺の門徒の中にもそこに行くといって私に報告しに来た方がいました。「住職、今からあのお寺に行ってお参りしてもらうんや」と。「これで三回目やから楽に私も死ぬるやろう」と言って、喜び勇んで私のところに来ました。私はちょうど大学出たばかりでだいぶヘソが曲がっていましたので、余計なことを言ってしまいました。「そうか、三回目のお参りに行くんか。それであんたも楽に死ぬるなあ。でも気つけや。三回目のお参りの途中でぼっくり逝くかもしれんぞ」と言いましたら、その人はものすごく怒っておられました。「何で怒るんかな」と思いました。後で聞いた話ですが、ものすごく流行っていたお寺なのですが、急にお参りが減ったようです。何故かというと、ある団体がバスに乗って三回目のお参りに行きました。三回目のお参りの人ばかりが乗ったバスがそのお寺に行ったのです。三回目のお参りを済ませて帰る途中のバスの中で、おじいさんがぼっくりと亡くなったそうです。すると恐くなってみんな行かないようになったというのです。不思議でしょう。「ぼっくりと死ぬる」という御利益の寺なのですが、ぼっくり逝くために行ったはずなのですが、それが帰りのバスだったらあまりにも早いでしょう。「そんな殺生な」という話でしょう。せめて無事に家に着きたいわけです。では

仏の願い、私の願い

「ただいま」と言つてそれで死ねばいいのかというと、それも早いわけです。ではみんな晩御飯を食べて、「これでじいちゃんも三回目のお参り済ませたぞ」と、「これで満願成就いつ死んでもいい」と、晩酌してそれでぽっくり逝けば満足かというところ、それです。では夜寝ているうち、それもあんまりという話です。では一週間後、それも早い。一年後、それも早い。三年後、もうちょっと生きる自信がある。「じゃあいつ死ねばいいんや」という話です。

いわゆる「死」というものを自分の中に捉まえないで生きていこうとしても全部上滑りします。行苦です。行苦は「諸行無常が納得いかん」ということです。「こんなはずではなかった」といつて人生を終えていかなければならないような、そういう苦しみです。根源的な苦しみです。自分には死がやがて訪れる。しかし今ではない。「じゃあ何時や」という話です。

我々は生きていることから死を見ます。だから死にたくない。死を、先送り、先送りにしようとしています。だから物事が非常に苦しくなっています。行き詰まっています。みなさんはまだ若いですから気がつきませんけれど、しばらくすると、例えば、目のこのあたりにシワができてきます。自分の女房を見てよく分かるのですが、「あ、こんなところ

にシワができた！」「いや、前からあるで」と言うのもすごく怒るのです。「こんなはずじゃなかった」といって、またいろんなものを塗るのですが、なかなか消えません。どんなシワが深くなっています。どんどん自分の死というものを迎えるという感覚が非常に鋭敏になってきます。それでも先送りにしようとするのです。

仏教は違います。死から生を見ていくのです。自分は死ぬ、自分は滅び行く身であるということをずっと習うのです。滅ぶというところから人生を見ていくのです。だから、人生はものすごく大切だということがひしひしと実感していきます。死のための準備、あるいは死を先送りにするということではないのです。普通は、平均年齢が八十歳とすると、五十になると「後残り三十年」と、引き算をします。「後何年生きられるかなあ」ということを思うのですが、仏法というのは足し算なのです。今日この一日ひととき、この出会いを頂いた、これに全力を尽くしていきましょう、という生きざまです。全部足していくのです。そこには大きな喜びがあります。この出会いを大切にしようという姿勢が生まれていきます。普段の我々の考え方とは全く逆転した発想です。

仏の願いとは全て我々の発想とは対極にある願いです。これは実は我々の中にある、深く、自分では気づくことの出来ない願いでもあるのです。親鸞聖人は、この『仏説無量寿

仏の願い、私の願い

経』の中にある、仏様が我々に願いをかけ、そしてたてた浄土の教えをずっと学んでいく中に何が見えたのかというと、我々の穢れたこの土(国)をきちっと見たのです。清らかなるもの、つまり浄土は何をしてくださるのかというと、我々の「濁世」じよくせ、濁りを明確に照らし出してくださるのです。浄土を習うことによって、穢れ、汚れというものがきちんと見えてくる、自分自身を思い知らされるわけです。これがいわゆる親鸞が学んでくださった仏法の根幹であろうかと思っています。

親鸞聖人は自分のことを「愚禿」ぐとくと名乗ってくれています。愚かで、禿<sup>かむろ</sup>、禿げているということです。頭がボサボサの状態です。禿は稲穂を切った後にその切り株から伸びて出てきた小さな稲穂です。形は切る前の縮小版ですが、そこには決して実はつきません。形ばかりで中身がないという意味です。それが禿です。愚禿、つまり「私は愚かだ」ということを明確に見てくださったのが親鸞聖人です。浄土を習い、私は愚かだということをきちつと自覚されたのが親鸞聖人なのです。これが実は仏教の一番大きな利益です。

「自分を知る」ということ。我々のものの知り方というのは、知らされて知るという以外に知り方を持たないということです。自分が「分かった」と言った時にはそれは妄念、妄想です。自分の目を通してものを観察するわけですから、やはり自分というものがどう

しても入ります。物を十分に観察する、如実智見にょじつちけんするということはあり得ない。そういう状況にあるのが私です。まさしく愚かとしか言いようがない、そういう自分をはつきりと自覚したのが親鸞です。何の言い訳もできず、如来から私の愚かさを知らされましたと頭を下げたのです。これが大事なのです。

ここにお仏壇がありますが、これが浄土の形を現しています。蠟燭の光、これは如来の智慧ちえです。全てのものを救わんとされ、隔てなく照らす教えです。くべたお香の香り、これは全てのものを包み込む如来の慈悲をあらわしています。そして仏花があります。一つの器の中に違う色の花がちゃんと収まるというのが浄土の徳です。これが本当に我々が願っている自分と世界の姿です。全てのものがバラバラで一緒、違いを認めることができる世界、こういうものがいわゆる浄土の姿です。我々の娑婆世界しやばは、白は白で固まって、黄色は黄色で固まって、赤は赤で固まって、グループ、言わば「仲良し会」を作ります。グループの中ではみんな仲が良いです。「私たちは仲が良い」と言いますが、赤は黄色をバカにし、赤は白を羨んだりします。戦争もそうです。国も一つの器です。互いの器が連携し合うことのない世界がまさしく我々の世界です。それが一つの器に収まるにはどうすればいいのか。そこで、我々が「自身を知る」ということが不可欠になります。

仏の願い、私の願い

私は今、金沢のお寺の住職をしています。もうそろそろ「報恩講」<sup>ほうおんこう</sup>という大事な行事が始まります。門徒さんの家一軒一軒に行ってお参りして歩きます。そこで「正信偈」<sup>しょうしんげ</sup>という親鸞聖人が作った歌をよませていただきます。ずいぶん前の話ですが、それは十月でしたが、非常に暑い日のことでした。毎月お寺に来て仏法を熱心に聞きにこられる老夫婦の所へお参りに行きました。そこで「正信偈」をあげた後でそのおじいさんが、「住職、疲れたやろ。まだ何件もお参りが続くんだろうから、ここでいっぶくしていったらどうや」と言ってくれました。「ほな、一服させてもらおうか」と言って座っていたのですが、そのおじいさんが台所に行くおばあさんに向かって「まだ、冷たいお茶あったか?」と、こう言うのです。「今日は暑いから住職に冷たいお茶を出したらどうや」と言ったら、そのおばあさんは「今、十月やぞ」と言うのです。「住職が夏衣から冬衣に着替えて来て下さつとるのに、ばあばが冷たいお茶を出したことが在所で知れ渡ったら「あのお茶を出すのが当たり前や」と言ったのです。そうするとおじいさんが「お前は何年仏法を聞いとるんや」と言いました。「念仏者は世事のことは二の次。世の習いは二の次。相手のことを考えて動くのが念仏者ではないか」と言うのです。立派なことを言ったので

す。夫婦間で立派なことを片一方が言うたいがいケンカになります。案の定ケンカになりました。おばあさんは「私も考えとる。住職に今冷たいものを飲ませたら、おなかを壊すかも知れん。」と言い返しました。三分間ほど、冷たいお茶にするか、暖かいのにするかでケンカしているのです。私の前で戦争が起きました。それで、三分経った時におじいさんが、「住職、どっちが良いんや」と聞きました。最初に聞けばいいのですが、全然聞かないのです。私はへそ曲がりですから「コーヒーちょうだい」と言おうと思ったのですが、「これ言ったらまた三分間やな」と思つて、「今さら言えんぞ。どっちの肩を持つんやと言つとるのと一緒やぞ」と言いましたら、夫婦そろつて「ああ、業いひさらしやったなあ」と言いました。

我々は「業さらし」なのです。いろんな行いをして、いろんな行動を取っているけれど、それは「さらして」いるのだと。良かれと思つてやったこともほとんど仇になっています。「大きなお世話」という言葉があります。他人のこと、友達のことを思つてやっているつもりが、「ありがとうの一言もなかった」とか、「せっかくしてやったのに」という心に瞬間的に変わることがあります。それは他人のことを考えたということになりません。我々はそのような程度なのです。

仏の願い、私の願い

その老夫婦は、「ああ、業さらしやったなあ。住職のためを思って、温かい、冷たい、  
 って言うのとったけど、結局自分の思いの中でしか動いてなかった。やっぱり仏法は本当の  
 ことを言い当ててくださっておる、私は愚かだ」と言ってくれました。お互いの「愚か  
 を認めた時に初めて二人が「ははは」と笑って和んでくださいました。これこそ、全く色  
 の違う者同士が一つの器に収まった瞬間です。「自分の愚かを知る」しかも仏法を通して、  
 阿弥陀の本願に触れて、自らが愚かだと、頭を下げていく世界が開かれていく、これがい  
 わゆる仏道です。誰に気兼ねすることがない世界です。偽ることのない世界が広がる。こ  
 れが「仏道を学ぶ」ということであろうかと思えます。

「愚か」という痛み、悲しみをいつまでも大事にできる世界、これが親鸞聖人が歩ん  
 ださった世界です。悲しみを大切にすると、悲しみを忘れない、痛みを忘れない世界、こ  
 れが仏道が一番大きな深まりではないかということをおもっています。仏教を聞いて、何か  
 楽しい世界に行けるとか、のほほんと暮らしていけるということではなくて、「ああ、愚  
 か」と、一番深い所にある悲しみ、痛みというものを大事に抱えることのできる世界を  
 我々が頂ける。仏と共に歩ませていただけるといいう世界、これがいわゆる仏教を学ぶとい  
 うことであろうかということをおもっています。



なかなか、仏道のご利益ということを語るには時間が足りませんが、一般的にイメージされている仏教と今語った仏教には非常に大きな隔たりがあるかと思いますが、自分のことを真正面から捉えることが出来るのが仏教であるということをお話しさせていただきました。

まず分かっていたいただきたいのは、自分の苦しみ、悩みというものを大事にできる世界が実はあるのだということです。浄土は我々の上の方にあるのではなくて、我々の足元を支えてくださる世界です。たとえ「ああ、地獄に落ちた」と思っても、その下からなお、支えてくれる大地、これが浄土かなと思います。どん底に沈んでも、そのまだ底に浄土があるということ、このことを一つインプットして、ここから続けて仏教の学びが深めていただければと思います。

ご静聴ありがとうございます。

——二〇一四年六月二七日——